

ユニフォームについて

奥平 志づ江
渡利 絢子

1. はじめに

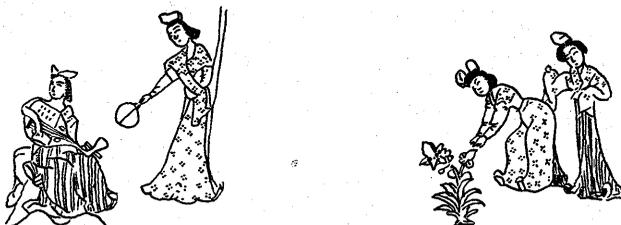
ユニフォームとは、その言葉の意味するように、統一された制服のことで、平服、または日常服と異なり、基準によって定められた一定様式の服装であり、その着方は勿論、材料、型、色、アクセサリ、携帯品に至るまで組み合わせて規定されるものである。背広、カッティングシャツ、ネクタイなど、同様の形をした勤人の服装も、ある意味ではユニフォームに近い平服であるが、色、型、アクセサリ、着装法などについて規定されなければ、ユニフォームとは云い難い。僧侶、学生、野球の選手の衣服も、身分、職業、団体を識別する一種のユニフォームである。ユニフォームの形態は、着用の目的によって異なるものであり、その効用も、その時代の宗教、文化、思想の変遷に左右されるものであるから、改廃、新制を伴うものであるが、その時代の、特に宗教、産業、政治の発展に、いつでも共通して追求されるものは、個々及び統一の美と、目的を効果的に果たす機能性であろう。そこで、ユニフォームをその着用目的から類別して考察してみるとともに、その数例について、文献によるもの、及び観察した結果を次に紹介したい。

2. ユニフォームの類別

(1) 儀式用

中世（奈良時代）朝廷の儀式の衣服として礼服、朝服（図1）、制服があり、礼服は朝廷の儀式に着用するもので、朝服は諸臣参朝時の公務服、制服は無位の官吏、一般庶民が公事に奉仕する場合に着用したものである。現在の大礼服、燕尾服（図2）、フロックコート（図3）は、宮中行事ならびに外交官の社交服として、また広く慶弔の諸行事に用いられている。

図1



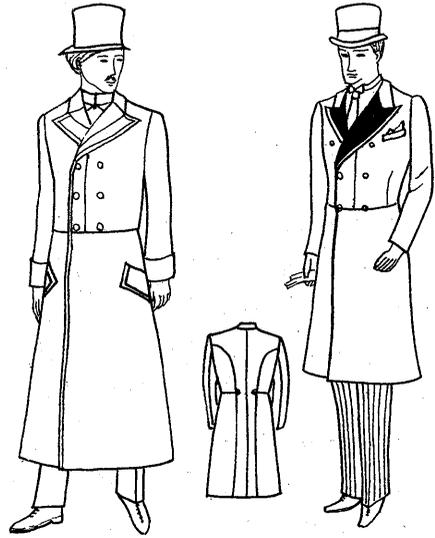
朝 服

図2



燕尾服

図3



19c末の
丈の長いフロックコート

現代
frock coat

(2) 職業用

裁判官、軍人(図4)、警察官(図5)、鉄道員(図6)、神主、牧師、船員、飛行機の操縦士、スチュワーデス(図7)、看護婦(図8)、コック、ボーイ(図9)などの着用するユニフォームは、それを着ることによって職業を判別することができるもので、いわゆる職業用ユニフォームであり、それぞれの職業に適応した機能を備えたものである。またこのうち、軍人、警察官などの制服は、団体としての機能とともに、諸行事の際の統一美を追求されることから、次の団体服に類するものと考えられる。

(3) 団体服

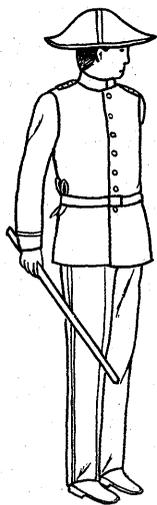
この種の制服は、その集団の主義や思想を統一し、作業や行動を規制する効果をねらって制定されているので、これを着装することによって、その集団の一員たることを自覚するという効能をもっているところに特色がある。交友親善団体なども、この種の制服を用いている。これなどは主として、職業、組織、所属等を団体として識別するために着用するもので、政治団体、青年団、ボーイスカウト、ガールスカウトなどの制服から、第二次世界大戦中の日本の国民服や、現在中国で用いられている人民服(工人服)まで種々様々である。

図 4



陸軍将校
(昭和18年)

図 5



明治6年当時の選卒

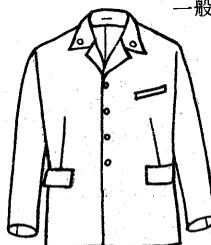


明治29年ころ
の巡査服装

図 6

道道具 (現在)

一般男子



(合)



(冬)

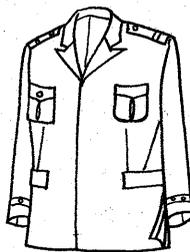
客扱専務車掌



(夏)



(冬)



鉄道公安官 (冬)



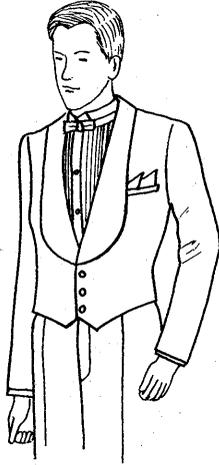
一般女子職員

図 7



日本航空スチュワデス
昭和42年(1967)

図 8



Pantry Jacket

図 9



厚生省指定の看護服(厚生型)



予防衣



明治27年当時の日本赤
十字社女子救護員制服



聖ヴァンサン・ド・ポ
ール教団の尼僧看護婦

3. ユニフォームの効用

ユニフォームの効用は、それを着用するもの、見るもの、双方に対する物理的、心理的効果とみることができよう。したがって、儀式用の礼服などの形態は、儀式の荘重な雰囲気醸し出すような重々しい、しかも全体として華麗なものではないなければならない。また、野球のユニフォームを例にとれば、チームを識別し、相互に仲間意識を昂揚してチームワークの効果をあげ、同時にその機能的で美しいデザインは、着用するものの志気を鼓舞して、軽快な行動をとらせることに役立っていると考えられる。学生服も、ある期間経過したならば、時代感覚にマッチしたもので、しかも流行と交感するデザインに変えるのが望ましい。いままでもなく、学生服は、学校を象徴するものであるが、必ずしもその様式を固定すべきではない。僧侶は僧衣を着用することによって、誰にでもその身分がわかり、僧侶自身お経を読む節まわしも上手に出来ると考えられる。警官も、駅員も同じであろう。民主主義時代におけるインテリ層だと自認するサラリーマンには、特別なユニフォームはないが、学業を終えて就職試験に出て行く若者達も、服装について気を使い状態をみると、忠実なる勤人としてのユニフォームを探し求めて

いるように思える。昔の武士が礼儀を失しない服装を気にしたのと同じように、彼等の求める制服に類するものは背広服であり、これが統一された場合は、サラリーマンのユニフォームと考えてよいであろう。工場の工員の多くは、通勤には背広服を着るのが一般的となっている。しかし、工場へ行くと、ロッカーから作業服を取り出して着替えるが、その作業服すなわちユニフォームは、着用すれば働いてみたくなるようなものが望ましい。昔は工場といえば、バラック建築の仕事場で、ナッパ服と呼ばれる作業服でよかったが、近代建築の、整備された工場での仕事には、当然すぐれたデザインのユニフォームが要求されてくる。サービス業のユニフォームとして、銀行員は顧客の信用を得られるように、商店員も、仕事の内容によって適当なものが必要になってくるし、デパートの店員、証券会社、喫茶店のウェイトレス、スチュワーデスなど、仕事の性質によってふさわしい制服がある。

4. ユニフォームの観察例

次に最近観察した数例のユニフォームについて紹介する。

(1) デパートの店員

a 販売員 図(1)-a、イ

白、グレイの縞の木綿地のシャツブラウスに、チャコールグレイのウールのジャンパースカートの組み合わせ。前中央はフアスナー明きで、ウエストライン、衿

(1)-a、イ



(1)-a、ロ



ぐりにステッチがしてある。(I デパート) 図(1)- a、ロ

テーマカラーをアレンジしたユニフォーム。白のシャツブラウスに、白とモスグリーン
の細かいストライプのジャンパースカート。8つのボタンと、斜めに切り
込んだポケットがアクセント。(T デパート)

b 案内係 図(1)- b

全体を白と紺で統一し、清楚な女らしさを表現。ノーマルなワンピースに白の
ベストと太めのエナメルベルトでアクセントをつけている。白の洒落れた感じの
トーク帽と手袋がポイント。(T デパート)

(1)- b



(1)- c、イ



(1)- c、ロ



c エレベーター、エスカレーターガール。図(1)- c、イ

ベージュの木綿地のワンピース。ミニスカートの脇をスリットし、下にホット
パンツを組み合わせた機能的なデザイン。手袋は白、靴下は紺、靴はベージュと
紺のコンビネーション。(I デパート)

図(1)- c、ロ

ミニのワンピースのシンプルな形を基調に、短かいケープで若々しいアクセシ

トをつけたユニフォーム。すっきりしたブルーグレーに、帽子とブーツの白さがさわやかな印象を与える。(Mデパート)

(2) 銀行及び証券会社の女子ユニフォーム

図(2)-a

機能的な美しさがポイント。ネービーブルーのツーピースに、ブルーの水玉模様のブラウスの組み合わせ。上衣の衿は若々しさを強調するUカット。
(M信託銀行)

図(2)-b

黒とバックカラーのウォームレッドのリブ編みのセーターと黒のジャージのジャンパースカートの組み合わせ。バックルのハートはシンボルマーク。
(D銀行)

図(2)-c

ローウエストの切替えと、活動的なボックスプリーツの紺のワンピース。ハイネックと袖口、ベルトのストライプに赤をあしらっている。(D証券)

図(2)-d

白のタートルネックのシャツとライトブルーのブレザーの組み合わせ。働き易さ、端正さ、ファッションをとり入れて一つにしたもの。(N証券)

(3) スチュワーデスのユニフォーム。

図(3)

紺のノーカラーのシンプルなワンピース。ローウエストに赤のエナメルベルト。バックルと靴の飾りは紺と赤。紺地に赤の縁どりをしたスカーフを首に結び、同じ赤と紺の帽子をかぶる。
(N航空)

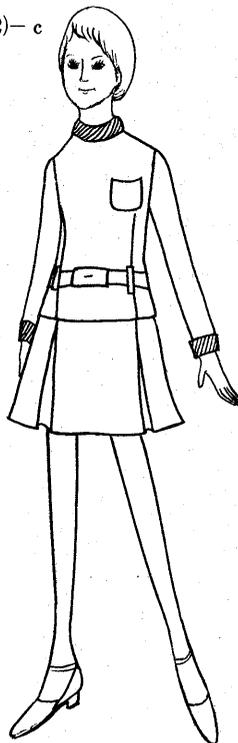
(2)-a



(2)-b



(2)-c



(2)-d



5. ま と め

ユニフォームは、平常服と異って、材質、色、デザイン、着装法を統一し区分している。したがって、着用者の階級や資格、役割を表現したり、またその作業や行動に必要な機能と装飾とを備えているものである。また一方、ユニフォームとして規定された着装法にそむいたり、アレンジしたりする自由が与えられていないところに特色がある。したがって、統一の美観はあるが、服飾による個性の発揮は出来ないわけである。最近のユニフォームは、デザインも、単にその機能性を満たすだけでなく、より美しいもの、着て楽しいものとなり、またユニフォームにより、その企業の特徴を強調し、イメージアップをはかるとともに、職業意識を向上させるよう、一段と工夫する傾向がある。色も従来の紺、黒、グレイなどの目立たない色から、赤、グリーン、ライトブルーなどに変わり、単一化した流行は次第に影をひそめ、個性的で、多様化したデザインのもものが流動的に形態を変えつつ採用される傾向にあり、またその変化のテンポも、ますます速くなって行くことは確かであろう。

(3)



参 考 文 献

- 1) 服装大百科辞典 文化服装学院出版局
- 2) 服飾辞典 田中千代編 同文書院
- 3) 日本服飾史辞典 河籾実英編 東京堂出版
- 4) 被服文化 No. 74 文化服装学院出版局